

巻頭言

沖縄から子ども・若者の未来を考える

加藤 彰彦(沖縄大学名誉教授)

現代社会の貧困化が私たちに苦しめている。中でも、子ども、若者の貧困化は6人に1人という凄まじさで成長期の彼らの希望を打ち砕いている。

貧困化は少子化ともつながっており、出生数も減っており、このままでは子どもの数は限りなく、減少していくと言われている。

少子化の背景には貧困という現実があり、子どもを産み育てる余裕もなく、日々自らの暮しに精一杯という生活がのしかかっている。沖縄で子どもたちの「貧困のイメージ」をインタビューしてまとめたものがある。

それによると具体的イメージとして学校では「学級費、給食費、PTA、遠足代などの費用が払えない」と考えており、家庭では「親が不在、一人暮らし、いつも空腹」。さらに地域では「お金がなく買い物に行けず、友達もできず、ヒマ」となっている。

その結果、子どもたちは「小学校が面白くない、いつも叱られ、人に気を使い、悲しく淋しく不安で、人とも関わりたくなくなる」と感じ「自分が好きになれず、反抗したり閉じこもってしまう」と応えている。

こうした状況の中で子どもたちは「あきらめ、引っ込み思案となり」将来への夢も持てないまま孤立し、反抗をくり返すことになる。

沖縄でも、こうした現実が生まれてきており、おとなになるというイメージも持ちにくくなっているのが現実である。

かつては、沖縄には身近にたくさんの農民や漁師、職人、三線や唄、踊りの芸能をするおとな達があり、子ども達は、そんな周囲のおとなをモデルとして成長していたのである。

しかし日本の近代化は故郷を離れ、都会へ出て身を立てることを奨めてきた。

その結果、若者たちはテレビやマスコミのアイドル、タレント、スポーツ選手に憧れて故郷を捨て、都会暮らしを始めるようになった。しかし都会の中には村とは異なった競争社会があり、現在のような貧困化、孤立化を生み出してきてしまった。

故郷も崩壊し、都会の孤立化も進行し、貧困化社会が現出したのである。

そんな中で、沖縄は子どもの出生率も日本一高く、高齢者も多い。カジマヤーなど

出生や高齢を祝う行事も多い。子どもや女性、高齢者を大切にしている文化が生きている。こうした文化を生かして、学校や児童館、公民館などを地域のコミュニティーセンターとして、地域再生の拠点にすることは充分可能だ。

その場合、最も困窮している人々や子どもを最優先にして受け入れていくことになれば、その人たちは苦しみを体験し、またそこから支えられて乗り越えられたことも経験しており、他の人のサポートをする人となっていく。保育園も学童クラブもそうした人々を優先し無料で受け入れ、一緒に育つという文化ができれば、子どもから高齢者まで全体を包み込んだ学び合い、支え合いの渦が地域全体に広がっていくはずである。

今回、名護市で行われた協同集会「命どう宝」は海に囲まれた島の文化を軸に将来展望を語り合うことになった。

海との共生は、自然との共生であり、他の人々、国々とも争うのではなく、協同し話し合っ共々に生きていく文化である。戦争を前提とした軍事費を削り、子ども若者支援と、新たな仕事おこし、地域コミュニティー再生へ使えば、子ども若者の希望の持てる暮らしが見えてくるという結論も出され、シンポジウムに参加した高校生、大学生からは、もっともつと地域と触れ、知りたい、学びたいという声があがり、若者たちのフットワークも生まれてくる予感が生まれる集会であった。沖縄の命は、いま静かに鼓動を始めようとしています。